

4	春日井	東部中学校	北久保 志草
分科会番号 1		分科会 国語教育（文学その他）	

協働的、主体的な学びから古典を楽しみ、学びを深める  
～「平家物語」の音読、群読を通して～

## 1 主題設定の理由

インターネットで検索すれば、様々な情報を手に入れることができる。学ぶための分かりやすい画像や動画、解説も数多くある。画面を開けば多くの知識を得ることができる。しかし、その一方通行の情報では、「わかったつもり」になり、理解を深めることにはつながっていないのではないかと感じる。学校で学ぶことの意義とは、五感を使って仲間と共に学び合い、理解を深めて学ぶ喜びを得ることではないだろうか。そして、日々の授業がわくわくして楽しいものであるならば、学びに向かう力が生まれ、学ぶ意義を感じ主体的に学ぶ姿勢が育まれるのではないか。

クラスの活動やグループ活動での仲間との関わりの中で、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、自分の思いや考えを伝え合う力をつけ、思考力や想像力を養い、学ぶことに意義を感じさせたい。「わかったつもり」ではなく、深い理解を得て、「わかった」「そういうことか」と、生徒が目を輝かせられるような授業を展開していきたい。

今回対象としたのは、2年生の37人学級の1クラスである。本学級の生徒はグループ活動において、確実に答えがあるものには自信をもって伝え合うが、自分の意見や考えを伝え合うことには消極的で、「主体的・対話的で深い学び」にはつながっていなかった。

しかし、2学期の初めの「盆土産」で、グループ内で音読をさせたところ、ほとんどの生徒が小声でぼそぼそと音読している中、方言の響きや表現を楽しみながら大きな声で音読する1人の生徒がいた。これは彼の文章内容の理解を深め、その後の試験結果にもつながった。このことは彼の自信となって、授業への取り組みが前向きに変化するきっかけになった。これについては、「4 生徒の変容」にて後述する。

そこで、読解の難しい古典を仲間と協働的に取り組む活動を取り入れると、学ぶ意義や喜びを感じて、自らの学びを広げ深めることにつながるのではないかと考えた。

## 2 研究の方法

### (1) 目指す生徒像

仲間と思いや考えを伝え合いながら、自らの学びを広げ深め合うことのできる生徒。

### (2) 研究の仮説

仮説1 グループ全員で創り上げる活動を取り入れることで、古典を楽しみながら協働的な学びをすることができるだろう。

仮説2 物語の場面の状況を可視化して考えやすくする道具があると、描かれた状況や心情を探る活動において思考力や想像力が働き、深い学びが得られるだろう。

仮説3 毎時の授業の振り返りを一覧にすることで、各々の学びや考えに共感したり、比較したりでき、自分の思いや考えを広げたり深めたりして主体的な学びにつながるだろう。

### (3) 研究の手立て

ア 仮説1 に対する手立て

「扇的」について、グループで群読発表する。

イ 仮説2 に対する手立て

物語の場面の状況を可視化して考えやすくするために、グループごとに扇子（平家の扇の代用）と菜箸（与一の矢の代用）を配付する。

ウ 仮説3に対する手立て

毎時間の終わりに授業の振り返りをする。Google スプレッドシート（以下スプレッドシート）の振り返りシートに、その日の学習を終えて理解できたことや気づいたこと、考えたことなどを入力し、共有する。

### 3 研究の実際と考察

中学校教育課程の単元の目標は、「作品の特徴を生かして朗読し、古典の世界に親しむことができる」「登場人物の言動の意味を考え、そこに表れたものの見方や考え方を捉えることができる」の二点である。この二点の単元の目標も踏まえた上で、授業を展開した。(資料1)

#### (1) 仮説1に対する実践① ～冒頭部分の群読～

「平家物語」の冒頭部分で基礎的な確認をした後、単元の最後に「扇の的」の群読発表をする旨を生徒に伝えた。

まず、群読のイメージをもたせるために、冒頭部分を使った簡単な群読に取り組みさせた。ワークシートには、1行ごとに1・2、2・3・4、全員、などと予め担当分けした数字を記入しておいた。(資料2) 4人グループの中で、1～4の担当を割り振り、担当部分を読むという簡単な群読である。一度読むごとに担当を交代し、4回読むことで冒頭部分の全文を声に出すことができるようにした。

最初は、各自ばらばらで、ただ声を出しているだけのものであったので、2人以上で読むときには互いの声を聞きながら声を合わせて読むよう指示をした。すると、4日目には、互いの声を聞きながら声を合わせ、グループ内で楽しみながら群読をする様子が見られた。

A : 歴史的仮名遣いを覚えるには何度も読んで覚えていくことが大事だと知った。  
 B : 歴史的仮名遣いは音読すると簡単だと思いました。対句を使うことでリズムを取ることができることがわかりました。  
 C : 対句を使うことで読みやすくなっていることがわかった。

【資料3 第1時の振り返りの一例】

その日の振り返りからは、繰り返し音読をすることで、仮名遣いを直すことが簡単に思えたり、対句のもつリズム感を感じ取れたり、古文の基礎知識を自然と理解することができていることが分かった。(資料3)

#### (2) 仮説2に対する実践 ～小道具 [弓矢と扇]～

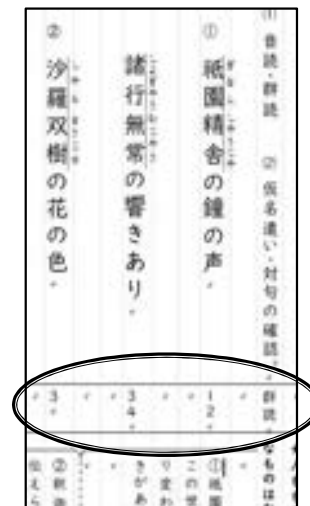
読解は想像力を働かせることが必要である。文章中の個々の言葉のもつ意味や内容をイメージし、想像することで理解が進み、その文章のおもしろさを感じることができる。しかし、古典は時代背景や言葉が大きく違うために、文章から言葉のもつ意味や場面の状況、登場人物の心情をイメージしたり想像したりすることは生徒にとっては困難なことである。

そこで、「扇の的」の学習では、場面の状況がイメージしやすくなる小道具があれば、理解や考えが深まるのではないかと考え、与一の矢の代用として菜箸を、扇の代用として扇子を各グループに1つずつ準備した。

「扇の的」の授業では、まず、最初の場面の与一の置かれている状況について読み取らせた。北風の強い2月の夕方、辺りは薄暗くなり、海は冷たく波は高い。扇の位置は定まらずひらめ

	各時間の主な内容	学習活動
1	① 「平家物語」の基礎知識の確認。	・作品の時代や種類、平家・源氏についての基礎知識を確認。 ・NHK10minを視聴。
	② 冒頭部分の確認。	・追い読み。 ・仮名遣い・対句の確認。 ・冒頭部分の群読。
2	① 「扇の的」背景の確認。	・現代文の部分の範読 (CD)。
	② 「扇の的」古文の音読。	・仮名遣いの確認と追い読み。 ・グループ内で1行ずつ交代読み。(毎回)
	③ 前半の場面の確認。	・与一の置かれた過酷な状況の確認。
3	① 与一の祈りの場面の確認。	・前時で確認した場面の状況を踏まえ、与一の心情の説明 (Googleスライドを使用。)
	② 与一によって扇が射られた場面の確認。	・言葉の意味を調べる。 →教科書、ワーク、タブレット端末を使用。 ・扇と矢の動きなどの状況を捉える。 →扇と矢の代用品を使用。 ・「夕日のかかやいたるに～」の場面を絵で表現。(色鉛筆等で色付けする。)
	③ 「黒筆をどしの男」の後半場面の確認。	・対句・擬声語・係り結びの確認をする。 ・義経の命令と平家と源氏の心情を捉える。
4	①	・群読の担当分け → 群読の練習
	② 群読 (担当分け～発表)	・群読の練習 → 群読の練習発表
	③	・群読の練習 → 群読の発表
5	① 「弓流し」の場面の確認。	・音読後、場面の確認。
	② 物の見方・考え方・単元の振り返り	・登場人物の言動からもの見方・考え方を捉える。 ・単元の振り返り。

【資料1 授業の流れ】



【資料2 冒頭部分のワークシート】

いている。その扇までの距離は 72m。与一は義経の絶対的命により、馬に乗って海の中に入り、弓を構える。弓を射るには過酷な状況である。

この与一の置かれた過酷な状況を現代語訳や挿絵を参考にしてグループで考えて発表させた。すると、与一から扇の位置までの距離を教室のタイルの大きさから考えて計算し始めた生徒がいた。およそ廊下の端から端までの長さがあるとその生徒は気がついた。そこで、廊下の端に立ち、扇を持って掲げてみた。生徒達は皆教室の外に出て、扇までの 72m という実際の距離を確認することができた。

次に、祈りの場面的那須与一の心情を捉えた。Google スライド（以下スライド）を使用し、与一が神に祈る場面と矢を放つ瞬間の与一の心情を、与一の置かれた状況や立場を踏まえて、簡単に文章で説明させた。生徒は、自分と人の文章を比較しながら、与一の決死の覚悟を捉えた。（資料 4）



【資料 4 与一の心情を考える】

その後、与一が弓を放つ場面について、言葉の意味や状況をグループで調べる学習を行った。「十二束三伏」や「扇の要ぎは一寸ばかりおいて」などの言葉、扇や矢の動きなどを、教科書や補助教材の資料、タブレット端末を使用して調べたことをワークシートに記入させた。

この活動時に、菜箸と扇子を各グループに配付した。生徒は、扇の要の位置、一寸の長さ、矢が当たった位置、扇と矢の動きなど、グループの中で小道具を使って活発に活動し始めた。この実際に見て手に触れられる道具は、生徒の想像力を膨らませ、楽しみながら学びを広げていくことが分かった。また、グループ内の生徒同士の距離感が縮まっていく様子も見られた。

その日の振り返りからは、与一の心情に思いを馳せたり、与一の腕前に感動したり、また、平家物語の作者を想像してみたりと、生徒の想像力が広がりを見せたことがわかった。（資料 5）

特に、生徒 E に見られるように授業に集中することが難しい生徒や、書くことの苦手な生徒も、小道具を使いながらグループの話し合いに参加して活動する様子が見られた。

- A : 扇の和紙の部分に当てたら多分貫通するので、扇が空に舞ったってことは硬い下の部分に当たったのではないかと考えた。
- B : 実際に扇と矢(?)を使用して再現することでどれほど扇を射ることが難しかったのかわかった。
- C : あの扇に矢を当てるにはとても難しい状況の中、神に願ったり諦めたりせず命を賭けてまで本気で矢を射るようすから、戦の本気度や緊張度が伝わってきた。とても無謀な挑戦に挑む与一もすごいと思った。
- D : 与一の凄さなどを大きく書いているので、この平家物語は、源氏側だった人が書いたのではないのかと考えた。
- E : 扇のぎりぎりですら当たったので神に祈ったことが結果にでたと思った。

【資料 5 第 4 時の振り返りの一例】

### (3) 仮説 1 に対する実践② ～「扇の的」の群読～

「扇の的」の内容を捉えた後は、群読発表に向けての準備に入った。

まず、群読がどのようなものであるかを、「ことばのがっしょう」群読コンクール（松山市立西中学校「生きる」）の発表の動画を視聴して確認した。この中学校の群読は、声の出し方、合わせ方、動作の付け方など様々な工夫があり、群読の面白さがよく分かる発表である。

動画を視聴した後は、グループ分けを行った。群読を行うまでの調べ学習では、1グループは 3～4 人の編成であったが、群読は声が多い方が様々な工夫を楽しめるため、群読の活動では 1グループを 5～6 人で再結成することにした。

台本となるワークシートは、「扇の的」の範囲を 2 つに分けた 2 種類を準備した。A の場面は、本文の始めから「春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。」までとし、B の

場面は、「与一、かぶらを取つてつがひ〜」から本文の最後までとした。与一が矢を放つ場面は、両グループ共通とし、AとBグループをそれぞれ3グループずつに割り振った。

台本となるワークシートには、時間短縮のために、1文の終わりや対句など、読む際に区切りが良いところで予め行を分けて表示した。また、本文の上段部分は、担当を書くことのできるスペースを作った。行の幅は広めに取って、ふりがなや現代仮名遣い、読むときのメモなどを記入できるようにした。(資料6) 台本の裏面には、担当の分け方や発表の仕方などの解説を載せた。(資料7) さらに、群読の発表で小道具を使用するかしないかの判断は各グループに任せることにした。



【資料6 (群読の台本B 表面の一部)】

ワークシートの裏面についての説明後、発表会は3日後に行うことを告げ、ここからは生徒がグループで考えて活動する時間とした。

担当分けの話し合いでは、何人で読むのか、男女に分けるのか、1人で読むのか、全員で読むのか、グループごとにそれぞれ工夫を凝らしていた。

読み合わせの練習が始まると、教室の中には「扇の的」を繰り返し読む声が響き渡った。練習の開始直後は、読めない漢字も多く、現代仮名遣いに直すこともままならず、何度も詰まりながら音読していたが、どのグループもグループ内で教科書を開き、声を掛け合って修正していく様子が見られ、スムーズに音読できる生徒が増えていった。



【資料7 (群読の台本裏面の一部)】

練習の様子はグループによって様々だった。小道具は使わず音読練習に集中しているグループ(写真1)。与一が射た扇の動きを考えるグループ(写真2)。「黒革をどしの鎧」の男として舞を舞う仕草を取り入れて練習をするグループ(写真3)。他のグループの取り組み方を観察し、自分のグループにアイデアを持ち帰る生徒もいた。



写真1 (群読練習)



写真2 (群読練習)



写真3 (群読練習)

群読にかけられる時間は3時間。第1時は担当決めと練習。第2時は練習と練習発表(各1分)。第3時は10分間の練習と発表、残りの時間を振り返りとした。

練習時には、発表する側と評価する側の両方の視点をもち合わせられるように群読評価シートを配付した。(資料8) この評価シートには、声や姿勢など発表の際の話し方のポイントの他に、人を引き付けるための群読の工夫として、テンポ、抑揚・強弱などの項目を表記した。裏面にも同じシートを印刷し、練習で意識したことを、他のグループの発表でも同じ視点で見ることができるようにした。

練習・発表		群読評価シート	
発表者	評価者	発表内容	評価項目
1	A・B・C	A・B・C	A・B・C
2	A・B・C	A・B・C	A・B・C
3	A・B・C	A・B・C	A・B・C
4	A・B・C	A・B・C	A・B・C
5	A・B・C	A・B・C	A・B・C
6	A・B・C	A・B・C	A・B・C
7	A・B・C	A・B・C	A・B・C
8	A・B・C	A・B・C	A・B・C
9	A・B・C	A・B・C	A・B・C
10	A・B・C	A・B・C	A・B・C

【資料8 (群読評価シート)】

ただ、この評価シートについては反省点が残った。他グループの群読の鑑賞中に、下を向いてメモを取ることに夢中になっている生徒が何名もいたことだ。鑑賞後に評価をする時間を確保することや、簡単に評価できる表記の方法を再考する必要があると感じた。

発表後の振り返りからは、発表と鑑賞のどちらも声や姿勢を意識し、心情や情景を想像しながら、古文を楽しんでいることが分かった。(資料9)

- A : それぞれの班の演技はいい表現されているなど思った。緊張して噛んだり姿勢が悪かったりした。もっと姿勢を意識すればよかったと思った。このグループでの群読によって、友情が深まった気がした。
- B : みんなどうすれば読む場面が伝わるのかを考えてやっているなどということが伝わってきました。演技を入れたりすることで、ただ読むだけよりもよりその情景が伝わってくると改めて気づきました。
- C : 人数が増えるほど、盛り上がりが伝わるけど、1人だと緊張感や、静けさなどの、その場の雰囲気が伝わった。
- D : どんなタイミングで矢が射られたか、どんなタイミングで扇が舞ったかがわかった。小道具や群読をしたりして古文の面白さがわかった。
- E : 最初は、古文は難しいと思って、内容もあまり理解できなかった。しかし、内容や登場人物の心情が理解でき、声に出すこと(演技をすること)によってその時の状況も想像しやすくなり、ようやく楽しいと思えるようになった。

【資料9 第7時の振り返りの一例】

#### (4) 仮説3に対する実践 ～振り返りシート～

毎時間の授業終了前の5分で、スプレッドシートを使ってその日の振り返りをする時間をとった。授業から学んだことをアウトプットして学びを整理し、前時の振り返りを確認することで復習をする。また、一覧にすることで、人の学びや考えを見て共感したり自分の考えと比較したりすることで、学びを広げたり深めたりして主体的な学びにつなげたいと考えた。

振り返りシートはどの単元においても同じ形式とした。生徒のタブレット端末の画面に表示されるのは、2～3名分となるように作成した。(資料10)これは、他の人も同時に書いていることを意識しながらも、自分の文章に集中して取り組ませたいと考えたからである。

【資料10 (振り返りシート)】

文章を書けない生徒には、「他の人の文章を参考にするのは構わない。自分なりに理解して言葉をもらって書いてもよい。しかし、そのままコピーして貼ってはいけない。」と伝えた。それでもなお書けない生徒は、下記の振り返りA・Bのように、他の生徒の文章から学んでいることが分かる。その他の生徒は、自分の学びが整理されたり、他の生徒によって自分の学びが広がったりしていることが分かる。(資料11)

- A : みんなが書いてあるから自分がわかんなくても参考にできる。
- B : 今日やったことが何だったのかをわかるようになるからいいと思った。
- C : 他の人の意見が見えるので自分が何を書いたら良いのかがわからないときに参考にしているので便利だ。
- D : 周りの人の意見を見る事ができることやそれによって自分の意見が変わったり付け加えたりすることができることがいい。
- E : 一つ一つの授業の中で何を学び、自分がどう思ったのかがわかるようになってよかった。

【資料11 2学期末の振り返りについてのアンケートの一例】

#### 4 生徒の変容

「盆土産」の音読で学ぶ姿勢が変化した前出の生徒は、漢字を覚えることが苦手であるために文章の内容を理解することが難しく、1学期は授業に特に前向きな姿勢は見られなかった。しかし、2学期は「盆土産」に続き、「扇の的」でも音読に意欲的に取り組んでいた。

彼は、与一的心情を捉える学習の時から、「群読の発表では、与一の祈りの場面を自分が読みたい。」という思いをもっていた。本文は難解な漢字が多く、言い回しも難しい。グループの仲

間に何度も誤読を訂正されながらも根気よく音読を繰り返していた。

群読発表では、矢（菜箸）を腰に差し、馬（椅子）にまたがり、目を閉じ、手を合わせ、与一になりきって発表をする姿があった。（写真4）

下記は発表前日の振り返りである。（資料12）その日の夜、暗唱できるまで練習したとのことだった。



写真4（群読の発表の様子）

だいたい読めるようにはなったけど、目をふさぎながら南無八幡大菩薩のところからがまだ覚えていないので、暗記して目をつぶりながら言えるようにしたい。群読をする際に、その人物が取った行動や言った言葉に対して考えると、その人物がどんな思いでその言動を取ったのか、普通に音読をするよりもとてもわかった。人物の心情を知るには、その人物になりきることで理解できることを今回の授業を通して知ることができました。

【資料12 第6時の振り返りの一例】

このことから、群読発表での目標を自ら設定し、達成しようと努力したことが分かる。授業で学んだ場面の状況や登場人物の心情を「わかったつもり」から「わかった」に学びを深められたことから、楽しさが生まれ、夢中になって音読を繰り返したのだと思われる。

## 5 研究の成果と今後の課題

1学期からの課題であったグループ活動を活発にさせ、人との関係の中で学び合う「主体的・対話的で深い学び」につなげようとした今回の「平家物語」の授業実践では、「仲間と思いや考えを伝え合いながら、自らの学びを広げ深め合うことのできる生徒」を育むきっかけとなったと感じる。

今回の実践から、生徒にとっては少し難しく感じる古典が、小道具と群読という授業の工夫によって、仲間と楽しみながら協働的な学びをすることにつながることができた。また、授業の振り返りを一覧にすることで、人の学びや考えに共感したり比較したりして、自分の思いや考えを広げたり深めたりして主体的な学びにつながるきっかけになったことも分かった。「平家物語」の学習以降、振り返りに書かれる内容は質と量ともに変化した。意欲的に取り組み始めた生徒に刺激され、同じように取り組み始めた生徒が増え、理解できたことや、学んだことについて自分自身の国語の力を振り返ることができるようになっていた。（資料13）

今回は、「平家物語」の学習時間を多めに取るようになったが、生徒の古典を楽しむ姿勢は、次の「徒然草」や「漢詩」を学ぶ意欲にもつながった。ただ、限られた時間の中でも学びを広げていく手立てについてはまだ大いに工夫が必要である。インターネットの世界だけでは味わえない仲間と共に学ぶ喜びを感じ、主体的な学びの中から目を輝かせて「わかった」「そういうことか」と感じられるような授業展開を今後も実践していきたい。

- A：意識して取り組んだなと思ったのは音読です。古典では群読の発表もあったから何回も読みました。前まで古典ってよく意味がわからなくて、ただ繰り返し読むだけだったけど、一文一文意味を理解して読むことで登場人物の心情や情景、また表現技法が使われる所が分かり、面白いと感じました。物語や評論文でもじっくり読んでいくことで筆者が何を伝えたかったのか、『文章の意味』を読み取れるようになったのでより意識して取り組みました。
- B：今学期で意識したことは読みながら情景を頭に思い浮かべ、理解を深めるということです。これをすることでその物語や文に対する理解がより一層深まっているのが実感できました。
- C：人物の心情や物語の情景を考えるのも、グループの人達と協力して取り組むのがだんだん楽しくなった。平家物語の内容が印象に残っている。現代仮名遣いになおして読むと、内容がわかって面白いし、リズムがかっこよくて、楽しかった。群読して、平家物語を表現したのも思い出になった。
- D：二学期は、筆者の心情が理解できるように沢山文を読むことに取り組みました。前は、わからないことをそのままにしてしまうことが多かったけれど、周りの人にわからないことを聞いたりできるようになったので、少し成長したのかなと思います。

【資料13 2学期の授業の振り返りの一例】